校長荒木規夫から保護者・生徒皆様へのメッセージ【不定期コラム№7】R3 7/5

「三中校長脳卒中で倒れちゃった⑥」

【車の免許更新顛末記②】

　ようやく半年ぶりに、主治医に会えたので、診察室に入りながら「お久しぶりです」と声をかけましたが返事がありません。あれ？と思って主治医の顔を覗き込むと不機嫌そうな表情です。

「免許の許可、出さないから」「え？」「うちの病院ドライブシュミレーターないし、正確な検査できないです。もし許可を出して、あなたが事故ったら僕の責任になる。だから出しません」「…でも、リハビリ病院では大丈夫だと」「じゃあ、その病院で出してもらって」「いや、これは主治医にお願いしろと」「僕はこれまでも、こういうのは全部断ってきた」「…では、ドライブシュミレーターがあって、診断して頂ける病院を、紹介して頂けますか」「探すように、事務方に指示するけど、見つける約束はできない」「では、見つからなかったら、何とか診断して下さい。もちろん、運転許可がもらえる診断がありがたいですけど、運転できない状況だという診断でも仕方ありません。その診断書をもって、セカンドオピニオンで、別の病院に行ってみます」「最初からその病院に行ってはどうですか。僕は出しません」「…運転できなかったら、生活が…」

　１月４日は、自宅から徒歩と電車を乗り継ぎ、三中へ初出勤しましたが、自宅と駅、駅と駅の乗り継ぎ、駅と学校の徒歩移動も結構厳しい。何よりも、週に何度も三中から教育委員会などへの出張もあります。この日まで、初日以外は、誰彼となく声をかけてくれて車に乗せてもらって対応していました。でも、こんなことをいつまでもは続けていられず、諦めるわけにはいきません。

「これ以上質問ない？　今日は診察料いらないから、後は事務方と相談して下さい」その時、事前に読んでいた、提出書類の文面を思い出しました。「あのう、先生、書いて頂きたい書類、読んでもらってますか？」「サッと読んだし、読まなくっても、内容はわかってますよ」「ドライブシュミレーターの検査の事とか書くところはなくて、今後、昏睡等が起こる可能性について、脳外科医としての知見を書いて頂くものだと思うので、読んで頂ければ書いてもらえると思うのですが」「よくあることだから、内容はちゃんとわかってますよ。もういいですか」診察室を出て、椅子に座って落ち込んでいると、看護師さんが来て声をかけてくれました。「いろいろ調べてみますので、お待ち頂いていいですか？」私は焦っていたので、食い下がりました。「先生は書類読んでないだけだと思うので、読んでもらってくれませんか？」「読んでいらっしゃると思いますよ」いろいろ話を聞いてくれた後、「大阪府は、脳卒中患者等を含め、運転許可についての評価・判定システムが遅れていると言われてます」などと話してくれました。「でも、だからといって患者さんの不利益になってはいけないと思っています。何とか方法を考えますのでお待ちください」

　…そういえば。看護師さんの後ろ姿を見送りながら、思い出していました。運転免許試験場での面談です。私の体の状況を全く見る気のない担当官は、医者の診断書で判断すると明言していました。まさに判断を、主治医に押し付けているのだなあ。主治医もつらいかも。

　2 時間ほどして、さっきの看護師さんが戻ってきました。入院していたリハビリ病院ではやはり診断書は出せないこと、受け入れてくれる可能性のある他の病院も当たったがコロナ禍でそれどころではないと拒否されたことなどを説明してくれました。「やはり、うちの病院で何とかすべきだと考えているので、最大限努力します。ただ、これ以上お待ちいただいても、今日中に結論が出るかどうかわからないので、今日はお帰り下さい。出来るだけ早くご連絡します」

　病院からバスと電車を乗り継ぎ学校へ向かった私が、三中の校長室に入った途端、携帯（未だにガラケー）が鳴りました。病院からでした。「診断書出ました。運転許可の診断です」「ありがとうございます！」

　帰りに取りに行き、診断書を見ると「リハビリ病院の運転に関する検査の数値から運転可能」とあり、主治医の印。すぐに、書類を揃え門真の運転免許試験場へ送付すると、2 日後にまた携帯が鳴り「書類審査の結果運転可能となりました」という連絡でした。え？電話連絡のみ？証明書もないの？曖昧なシステムに首をかしげるばかりでした。

　振り返ってみれば、高齢者の自動車事故が報道される度、「免許返納すべき」「許可を出すシステムつくれ」などの論調に違和感なく同意している自分がいました。父に「返納したら？」と声をかけてもいました。返事をしなかった父は、どんな思いで私の言葉を聞いていたのかと考えこんだ私でした。

【不定期コラム№8】へつづく